

球電とみられる雷神

原見敬二*

雷は上代農業社会にとって、猛威をふるう恐怖の対象でしたが、これを神として祀って、豊作ひいては社会平穏を祈願してきました。そこで、古事記の神代巻から気象学的に雷神と考えられる神々を探すと次の3柱となります。①建御雷之男神(タケミカヅチノヲカミ)、②八の雷神(ヤクサノイカヅチガミ)、③正哉吾勝勝速日天之忍穗耳命(マサカアカツカチハヤビアメノオンホミミノミコト)。このうち②の八の雷神は球電と考えてみましたので次に述べます。

祖国建設の途中、倒れられた伊邪那美命(イザナミノミコト)は黄泉国(ヨモツクニ・あの世)に住まわれた。ご夫君の伊邪那岐命(イザナギノミコト)が、妻である伊邪那美命を連れ戻そうとされ面会に出かけられたのである。だがしかし、妻は「見ては駄目よ」と言って殿内(トノヌチ)に隠れてしまわれた。が、伊邪那岐命は強引に真暗な殿内に入れ、かすかな明りで妻の死体を見てしまわれた。

それは、頭や手足などに八つの雷が成っていたと記されています。この状態は肉体の腐乱を示していて、高温

多湿の暗やみのなかで発光して燃えるように見える鱗を恐怖の表現として雷になぞらえたと考えられます。特に陰(ミホト)には折雷(サクイカヅチ・日本書紀では裂雷)が居ったとの表現は、女性に落雷したときの状況を端的に示すものです。

驚ろいて逃げ出した伊邪那岐命を追撃したのは青白い電光色の八の雷神でした。しかも多数の黄泉軍(ヨモツイクサ)を従えていたとのこと。死体の鱗が走って追いかけることはありません。そこで、この追撃軍である雷神達を球電現象であると考えてみます。直径30cmぐらいの大きい球電は八の雷神で、10cmぐらいの小さいのは黄泉軍というわけです。

とにかく、伊邪那岐命は包囲網を再三突破して黄泉比良坂(ヨモツヒラサカ・今の島根県八東郡東出雲町)まで退却してきました。そこで桃の実を3個追撃軍に投げつけて撃退に成功されています。桃は球電のような色をしていて、地上すれすれの球電対球電のはなばなしい戦闘が展開されたのです。つまり、大落雷によって事件は解決されたと考えるわけです。桃は悪霊悪鬼退散に使われたのです。

* Keiji Harami, 長田神社。

NEWS

世界の異常天候とその影響評価(休載)

世界の異常天候とその影響評価については、アメリカのNOAAから気象庁気候変動対策室へ“Climate Impact Assessment”が末着であり、今月号は掲載でき

ませんでした。入手できしだいまとめて掲載する予定です。

(天気編集委員会)